『日本言語文化研究』第十五号（二〇一一）

『枕草子』の語法（二）
―随想章段にみる「時」の認識と叙述法

糸井　通浩

〔はじめに〕本稿の目標―これまでの論考との関係

本稿は左記の二論考に続くものである。

① 『枕草子』の語法―時の助動詞を中心に（一）（拙編著『日本古典随筆の研究と資料』二〇〇七、思文閣出版・龍谷大学研究叢書）

② 古典にみる「時」の助動詞と相互承接―『枕草子』日記章段における（『國語と國文學』平成二十一年十一月号）

①では、『枕草子』の類聚章段を対象に論じ、②では日記章段を、そして本稿では、随想章段を対象にして、その叙述方法の特徴とそれに関わって、「時」の表現がどのように持ち込まれているかを論じたい。①②、そして本稿を以て、『枕草子』の叙述法と時の助動詞の関わりについて全体にわたって考察したことになる。

日本語では実質概念語を、体のことば（事物―名詞）・用のことば（事態―動詞）・相のことば（様態―形容詞、形容動詞、副詞）に分類することができる。

この三種は、日本語の認識上の基本語彙である「もの・こと・さま」にそれぞれ対応していると見ることができる。

ところで、「をかし」の文学と評されるように『枕草子』は、基本的なベースに「をかし」という評価に代表されるような、心に印象づけられる事象を記述した文学であるが、その叙述のスタイル（文体）は多様である。しかし、大きくは類聚的方法、日記的方法、随想的方法に分類できると言うことになろう。この三種の方法が、「をかし」と認定される事項が、それぞれ「もの（事物）」であり、「こと（事態）」であり、「さま（様態）」であると言えるのではないかと考えられる。

しかし、実態はそのように単純に図式化できるものではなさそうである。

まず類聚章段は、冒頭に「すさまじきもの」「めでたきもの」などと評価語を示して、その評価に叶うものを列挙する章段と、「をかしきもの」と評価できる事物を、「山は」「市は」などとその評価の対象の範囲を限定して、その範囲内で該当するものを列挙する章段とを合わせて言うのが一般的であろう。「事物」というように、「もの」として存在するものを対象にするのが中心であるが、「もの」として存在するものだけでなく、「こと（事態）」として存在する事態も対象としている（例：「（をかしきもの）見物は　臨時の祭。行幸。祭のかへさ。御賀茂詣」）。「をかし」に叶うものとして、該当の事項がなぜ取り上げられたか、その理由が読者にすぐさま納得されないと思われたとき、その根拠を示す文章が付加される。それには、体験を根拠とする日記的なものと、一般論的に根拠を語る随想的なものとがある。

日記章段は、宮廷生活を中心に実際にあったこと、筆者の経験、体験したことを臨場的あるいは回想的に記述した章段である。特定の一回的な出来事の記述、つまり「こと」を対象にした章段である。類聚章段の

「こと」（事態）とは異なる。例えば、「卒業式」という事態でも、あのときあそこでの、個別的な特定の卒業式の場合もあれば、個別の集合体としての、卒業式とは何かに答える卒業式とがあるが、この違いに相当する。日記章段の「こと」は前者の卒業式に相当し、類聚章段では、後者の卒業式を対象とする。

〔一〕随想章段の「さま」志向

随想章段は、類聚章段や日記章段ほど、文章スタイルに独自性があるとは言えない面がある。あるいは、叙述に多様なバリエーションがあると言うべきかも知れない。日記章段的なものから類聚章段的なものまで存在すると言える（〔二〕で触れる）。しかし、概して「をかし」という評価は、存在する事物に対するもの（類聚におけるような）でもなく、現実にあった出来事自体に対するもの（日記におけるような）でもなく、ある事態の様態（さま）に向けられたものだと言えるだろう。事物や行為に対してでなく、事態の状態（有様）を焦点化してそれを評価の対象としている。

『枕草子』には、助動詞「たり」の使用が圧倒的に多いという指摘がある[注①]。「たり」の使用は、大きく連体修飾用法と述語的用法（文末とは限らない）とに分けられる。体言を修飾する「―たる」は、体言（事物）の今おかれている状態、あるいはそれが持っている性質を示す。

ア　所につけてわれはと思ひたる女房の…（2）[注②]

イ　たき物の香、いみじうかかへたるこそ、いとをかしけれ（56）

アが連体修飾用法の「たり」の例で、イが述語的用法の「たり」の例である。後者は、厳密には連体形で体言相当の句を成していると考えられるが、敢えて言えば「さま」（「こと」とも見られるが）の認識を示していて、その「…たる（さま）」を「いとをかし」と評価していると見る。

ウ　むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる（1）

右の例は、アの用法もイの用法も併せ持つ例と言うことになる。「…たなびきたる（さま）」が「をかし」に叶う事象であることを示している。ついでながら、類聚章段で「をかし」の対象として取り上げた事物（もの）に修飾語がつくとき、「…たる」という連体形を伴うことが多いが、「もの」を「をかし」の対象とするときも、そのもののある有様に評価の焦点があったことを思わせる。例えば、「瓜にかきたるちごの顔」（144）、また「蓮の浮葉の、いとちいさきを池より取り上げたる」（144）も、「（蓮の浮葉）の」の「の」は同格の「の」で、その後の叙述は「蓮の浮葉」のある状態である。

① 雨など降るも（をかし）（1）

② 雪の降りたるは（いふべきにあらず）（1）

「降る」は、継続性の動作で、①の例は、裸形「降る」で「降りたる」に相当する。状態の持続を含んでいる「行く」「見ゆ」など、動詞によっては、「たり」形を取らずに、状態（さま）を描く場合がある。では、②はどうか。雪の場合、「降りたる」は、降った結果としての積雪の状態を意味していることが原則であったようだ。そして、例えば、

③ 雪のかきくらし降るに……白うつもりて、なほいみじう降るに…（275）

この③に見る「降る」は、降り続けているの意で用いられている。

裸形と「たり」形の使い分けがいつも「降る」に見られるようなものになるかというと、そうではない。ただ、一般的には、裸形は動作・行為に注目し、「たり」形は現代語の「―ている」「―てある」に相当して、その動作の持続、あるいは動作の結果の存続を状態（さま）として認識していることを示す。「―給ふ」と「―給へる（給ひたり）」の違いもそのように解すべきものと思う。

④ びらうげはのどかにやりたる。いそぎたるはわろく見ゆ。

網代ははしらせたる。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やる程もなく過て、とものひとばかりはしるを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しくゆくは、いとわろし。（29）

④は、29段の全文である。一見、「車は」という冒頭が落ちた類聚章段の一つではないかと思えるが、随想章段と見るべきものである。「をかし」評価の対象は、「もの」としての車（牛車ー「びらうげ車」と「網代車」）にあるのでなく、それぞれの牛車の走る様子（さま）が「をかし」評価の焦点になっているからで、随想章段の類と判断される。ここでは、二つの牛車の「やる」「走らす」様の魅力が対照的に捉えられていることが注目される。

ところで、類聚でもなく日記でもない、随想という叙述法の特徴はどこにあるだろうか。渡辺実氏は③は、次のような指摘をしている。「ならずは」（さもなくば の意・33）について「服装を確定せず、選択の幅を設けているところに、やはり随想としての書き出しが尾を引いている」と指摘し「もしは」（33）も「随想の言い方」という。33段の書き出し「七月ばかり、いみじうあつければ、…」を随想の筆致と捉えた上での注である。「しろき衣どものうへに、山吹、紅などぞきたる」（182）の「山吹、紅」についても渡辺氏は「選択的に並列されている」のであり、「南ならずは東の廂の板の」（184）も選択的表現で「随筆であることを示す言葉遣い」と指摘してる。

こうした選択的叙述、あるいは幅を持たせた叙述は、接続詞「また」や副助詞「など」「ほど」「も」などの使用が目立つところにも現れていて、描かれる事態が個別的かつ特定的な事態ではないこと（つまり日記的な実際あったことの記録ではないことを意味する）が背景にあり、いわば、係り助詞「こそ」構文の多用（これについても後述）が語るように、事態の、「をかし」

と評価できる典型を模索してゆれる姿勢がそこには見られる。随想章段は、テーマ（話題）に即して「をかし」の典型的な事態を仮想的に描くことが特徴と言えるだろう（後述）。

〔二〕随想章段と助動詞「き」の生態（付・「けり」）

私見では随想章段は訳90段を数えるが、うち12段に過去の助動詞「き」（「けむ」を含む）が用いられている。類聚章段や日記章段に見られるものには、筆者（表現主体）の執筆時（今・ここ）を基準時にして過去の事態を示す（この場合は、体験の過去と言ってもいい）というケースが多いが、例えば、次の例は少し異なるところがある。

⑤ よべ枕がみにおきしかど、をのづからひかれ散りにけるをもとむるに、くらければ、いかでか見えん、……とばかりこそいふらめ。（60の段末）

「よべ」のことゆえ「しか」が用いられているが、「今日」に対する「よべ」である。「今日」は筆者の執筆時の今日ではない。仮想された、朝帰りする男の今日（今ここ）である。「らめ」という推量が、その男の（今ここ）に視点をおいて時が認識されていることを示す。筆者の執筆時（これを発話時という）を基準時とせず、描かれる人物・事態の時（今ここ）を基準時とする場合を事態時という。（今ここ）でのこととして描かれる事態を（今ここ）として描き、その「今」からは明らかに過去のこと（すでにあったこと）と認識される事態を助動詞「き」で捉えているのである。

⑥ 祭の帰さいとをかし。昨日はよろづのことうるはしくて、……汗などもあえしを、今日はいとくいそぎいでて、葵かづらどももうちなびきてみゆる。（205）

⑥は、祭見物にでかけた人物を仮想的に描いているが、視点は「今日」にあり「見ゆる」と（今ここ）のこととして描かれていて、過去「し」は、「今日」を基準時

として、「昨日」のことを、過ぎ去ったときのことと認識していることを示している。筆者の執筆時(発話時)から見た過去ではない。⑤の例に同じである。ただし、⑥(205)は、類聚章段に属するが、「をかし」の対象として取り上げた、各項目を詳しく記述する部分は、随想章段のスタイルと見て、ここに取り上げた。

随想章段の「き」の用い方は、大きく二種に分けられる。一つは、今述べてきた、描かれる事態時を基準時にして過ぎ去ったことと認識する場合で、今ひとつは、筆者が執筆時(発話時)を基準時にして、(今ここ)からすれば、過ぎ去ったことと認識できる時を示す場合である。

後者の、筆者の発話時を基準にして、過ぎ去ったことと認識される事態は、必ずしも筆者の個人的体験ばかりではない。

⑦ いつかはことをりに、さはしたりし。(36)

「いつかは(かつて)」「はやくは」と過ぎ去ったときのことを「し」でとらえ、言外に「今」は違うということを匂わせている。世間のありようが、今に対してかつてはこうだったと言う場合にも、時間の違いを意識して「き」が用いられる。「いつかはそれを恥ぢかくれたりし」(21)、「日ごろこもりたるに、昼は少しのどやかにぞ、はやくはありし」(115)などの「し」も同じである。

助動詞「き」の用法として二種あると述べてきたが、両者に共通している、「時」の認識における根本的な機能は、描く視点時を(今ここ)として、描かれる事態が視点時(今ここ)からみて、過ぎ去ったときの事態と認識されるとき、その事態を「き」で捉える、ということになる。言い換えれば、視点時が、筆者の(今ここ)つまり発話時か、描かれる事態の(今ここ)つまり事態時か、の違いがあるということになる[注4]。

なお、助動詞「けり」についても、随想章段に見られるものに関して観察しておきたい。「き」と「けり」

は共起することがなく、その点で異なる文法的範疇を持っているとは見られなくて、従来、「き」か「けり」かという同一範疇にあって選択的な関係にあると見られてきた。つまり同一範疇とは、「過去」あるいは「回想」という範疇と見られている。

「けり」が語源的に存在詞「あり」を含んでいることは誤りない理解であろう。事態をの存在を今において認識していることを敢えて明示するところに、「けり」の主体的立場の表示、つまりムード性の働きが読み取れる。このムード性を従来、詠嘆、気づき（一種の異化作用）などと言ってきた。単に描く事態を客観的に事態だけを表現するのなら、「けり」をつけなければいい[5]。逆に「けり」をつけて事態を認識するのは、その事態に対してある種の主体的思い入れを持つことを示したいからである。「けり」が対象としてとる事態は、視点時との関係で言うと、現在のこと、過去のこと、過去から現在に続いていること、あるいは一般的理法に関することまで、時間的に制約がないことに注意したい。その点「き」は、視点時からみて、明らかに過ぎ去った事態についてのみ用いるという時的制約がある。ここに「き」と「けり」の本質的な違いがある。

「けり」にムード性があることは、「けり」表現に表現主体の存在を彷彿とさせるものがあることを意味する（物語地の文の「けり」は原則として、語り手の存在を感じさせる）。「けり」の理解で大切なことは、「けり」によって、誰の主体的な意識が表現されているか、である。

⑧　「いで給ひにけるをえ知らで」（171）

⑨　「さてもきはきはしかりける心かな」（274）

⑩　（ことなりにけりとおどろかれて）（220）

⑧⑨は「会話文」の例、⑩は「心内語」の例で、いずれも「けり」は、会話の主、心内語の主の主体的認識であることを意味する。これらを「けり」を用いない表現に変えても、描かれる事態の情報が異なるわけで

はない。地の文の「けり」は、原則として地の文の表現主体である筆者の主体的表現ということになるはずであるが、随想章段には、そう単純には捉えきれない例がある。

⑪　（扇・畳紙などが）をのづからひかれ散りにけるをもとむるに（60）

⑫　ここへとしも思はざりける人もたちどまりぬ。（73）

これらにおいて、事態が「けり」で認識されているが、その認識をしているのは誰なのか。筆者だとは言い切れないものがあり、叙述の視点を、この場に登場している人物において、その人物の事態に対する「思い」が表現されているように思われる。しかし、筆者の主体的認識を示していると解することも否定しきれない。こうした「けり」は物語によく見られるものである。つまり随想章段で、これらは物語的叙述になっているのだと解される。

随想章段のいくつかでは、仮想された場面を具体的に人物を配して、一つの典型的な状況を描いている。一種の物語の手法である。筆者は語り手となり、その場に居合わせているかのような描写もある。例えば「五月ばかりなどに山里にありく」の段（206）などは、随想章段の代表的な章段の一つであるが、筆者の実体験を語った日記章段かとも思わせるほど、一人称小説のような叙述になっている。その段に、

⑬　下はえならざりける水の（206）

⑭　蓬の、車にをしひしがれたりけるが、（206）

と「けり」の使用がみられることは注目してよい。随想章段での「けり」の使用は、設定された人物に関わっていることがらを叙述するところに多く用いられている。

（三）随想章段とその下位類

「をかし」の追求を目指す『枕草子』は、その評価に値する事象を取り上げているのであるが、「をかし」

きものかどうかの判断をする価値観として、その典型を求める、あるいは最もそれらしいものを選び出そうとする姿勢が見られる。次の段は、それを語る象徴的な段である。

⑮　冬は　いみじう寒き。夏は　世に知らずあつき。（113）

⑯　又、装束し壺胡籙負ひたる随身の出入したる、いとつきづきし。（57）

「つきづきし」の評価語自体は多く用いられているわけではないが、筆者の美意識の根底には、この「つきづきし」という評価が存在していると見られる。それが随想章段では、事象のつきづきしき「さま」が追求されていると括れようか。つまり⑮⑯の、文末の連体形止めは、いわゆる余情表現（「ことよ」の略と見る）による詠嘆ではなく、連体形のあとには「さま」認識が隠れているとみたい。

先にも述べたが、類聚章段、日記章段が比較的はっきりした文章スタイルを持っているのに対して、随想はその他の文章スタイルと言っていいほど、文体に幅がある。ここでは、試みに、随想章段と判断した章段を大きく三種（以下のA，B，C）に分類してみる。まずは、それぞれの代表的な段を事例として取り出しておく。

（A類）

a　春は曙。やうやう白くなりゆく、やまぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。以下略（1）

b　びろうげはゆるやかにやりたる。（29）④に同じ

「春は曙」の段は『枕草子』を代表する段であるが、A類に属する段は少ない。「さま」に「をかし」を見ている点で、随想章段の一類である。ある範疇（「春は曙」の場合、「四季」という範疇）に属する箇々（春、夏、秋、冬）について、それぞれの「をかし」に値する「さ

ま」を捉えている。bの章段（29）がここに属するのは、「車（牛車）」という範疇が意識された段と考えられるからである。前提となる範疇（四季・車）は表現されていない。⑮（113）もこのAに属する。一見、「池は」「虫は」などの類聚章段に属するかと見えるが、文章の発想は全く異なる。

（B類）

a　思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。ただ木のはしなどのやうに思ひたるこそいといとほしけれ。以下略（4）

b　陰陽師のもとなる小童こそ、いみじう物は知りたれ。以下略（281）

c　かしこき物は、乳母のをとここそあれ。以下略（180）

d　正月に寺にこもりたるはいみじう寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。以下略（115）

随想章段では、このB類に属する章段が最も多い。テーマ（または話題）に関して、その典型的な「さま」（状況）を捉えようとしている。そこには批評的、評論的な姿勢が見られる。文章のスタイルを形成する特徴ある語法については、次の節で改めて考える。

（C類）

a　きよげなるをのこの、双六を日ひと日うちて、なほあかぬにや、みじかき灯台に火をともして、いとあかうかかげて、敵の、賽をせめこひて、とみにも入れねば、筒を盤のうへにたてて待つに、（略）心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりかにみゆれ。（138）

b　五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。以下略（206）

筆者の実体験を描いた日記章段かも知れないと思うほど、想定された人物（たち）の行動がリアルに描かれていて、物語的な記述になっている。筆者自身もその場面・状況に居合わせていて、右記のb（206）など、

言わば一人称の語り（私小説）ではと思わせる段もある。実体験の記録か、仮想された事態か、判明しがたいが、事態のある様子（さま）に「をかし」を追求する姿勢は、随想章段の特徴である。

（C類）には、二種類の描き方がある。一つは、a（138）のように、冒頭からいきなり設定された人物の行動を描くもので、物語のある場面・状況を切り取って語っているというスタイルである。もう一つは、b（206）のように、時季・時候を冒頭において、ある事態・行動を描くというものである。ただし、「八月つごもり太秦にまうづとて見れば」（210）の段は、後者（b）に属する随想章段かと思わせるが、人の行動に関心を示した、筆者の経験を語った日記的な段と見るべきであろう。いずれにしろ、ほぼ事態の現場に視点を置いた描写になっていて、回想的な記述にはなっていない。

（四）（B類）のスタイルと語法

＊　冒頭「～物は」の章段

先に例示した（B類）c（180）の「かしこき物は」がその一つ。類聚章段の「うつくしき物」「ちかくてとをき物」などと紛らわしい。「～物」の後に主題提示の「は」をつけるかつけないかの違いだけであるが、叙述の発想は全く異なる。類聚章段には、「池は」「見物は」など「をかし」の対象の範囲を限定して、その下位類に属する事物から、「をかし」の評価に叶う物を求心的に列挙するタイプと「うつくしき物」「ちかくてとをき物」などという観念をテーマに、そういう観念に該当する事象を拡散的に列挙するタイプとがある。随想章段の「～物は」の段は、類聚章段の後者と似ているが、テーマの観念に該当する事象を拡散的に探し出すのではなく、テーマの観念に最もふさわしいもの、いわば典型を求める、求心的な発想にある。次の例もその一つ。

⑰　ふと心おとりとかする物は、男も女もことばの文字いやしう遣ひたるこそよろづのことよりまさりてわろけれ。（186）

⑱ 位こそ猶めでたき物はあれ。（179）

この⑱の冒頭文も、「猶めでたき物は、位こそあれ。」と言い換えられるとすれば、この類に属するのである。⑱のタイプも含め、「～物は」の章段は6章段になる。なお、「～物は」ならぬ「（～人）は」の段がある。

⑲ 説経の講師は、顔よき。講師の顔をつとまもらへたるこそ、その説くことのたうとさもおぼゆれ。以下略（30）

や「をのこは」（45）、「ちごは」（56）などがこの類であり、類聚章段の「（物）は」の段とは叙述が異なる。

＊ 章段冒頭と「こそ」構文

先に例示した（B類）a－dはそれぞれ冒頭の一文で、すべてが「こそ」構文になっている。随想章段と認める、すべての章段の冒頭が「こそ」構文になっているわけではないが、特にこの（B類）と認める章段は、多くが「こそ」構文になっている。先に見た「～物は」型の冒頭文6例のうち、次の例を除いてすべて「こそ」構文ではじまる章段である。

⑳ 身をかへて、天人などはかやうやあらんとみゆる物は、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる。以下略（228）

ただし、右の例⑳は、「こそ」構文になってはいないが、「～たる」の後に「こそあれ」が省略されている勢いの文である。渡辺氏[注⑥]は脚注の現代語訳で「（といったのがそれだ）」とことばを補っている。ちなみに先に示した（B類）c「かしこき物は、乳母のをとここそあれ」（180）とあるのが参考になる。

また、冒頭の「こそ」構文は、例えば、

㉑ 殿上の名対面こそ、猶をかしけれ。（53）

「こそ」を受ける述語部に「をかし」などの評価語がおかれることが類型をなしていて、注目される。もっとも、多くはプラスの評価語であるが、「にくし」（54）などマイナスの評価語であることもある。

冒頭文が評価語や思考動詞を述語とする「こそ」構

文であることは、類聚章段、日記章段に比べて、随想章段において圧倒的な頻度を示している。このことが意味するものは、取り立て助詞「こそ」の機能からみて、随想章段が基本的に、テーマ（話題）に関して「をかし」（あるいはある評価）の典型を追求する発想の文章であることを意味している。「こそ」構文の冒頭文に続いて、その理由や根拠になる事情を、以下に記述しているのである。

＊　仮定・婉曲の「む」

（B類）a（4）の「思はむ子を法師になしたらむこそ」の二つの「む」は、学校文法などで言えば、「仮定」あるいは「婉曲」とされる用法である。随想章段に見られる、この仮定の「む」はすべて（B類）に存在する。

助動詞「む」には、（ア）「けむ」「らむ」とテンス的に選択関係にある、いわば未来の事実であることを示す用法と、（イ）現在のことや理法に関して、表現主体にとって確定できない、不確かなことであることを示す用法（「かへる人々やあらむ」（115）「いかなる物ならむ」（185）などの「む」）と、（ウ）主体（今ここ）とはアクチュアルな関係にはない、仮想された事実であることを示す用法とがある。最後の用法が、学校文法で言う「仮定・婉曲」の用法である。三つの用法に共通していることは、主体（今ここ）にとって「未確認」な事態であることを示す機能である。これが助動詞「む」の本義である。

（ウ）の用法が、（B類）に用いられているということは、ある状況を仮想して叙述しているのが（B類）であるからであろう。その点、（C類）も物語的に仮想された事態が語られているが、それは虚構ながらも現実的に存在する事態であるようにリアルに描くものであるから、（ウ）の用法の「む」は用いられないということであろう。

＊　「らむ」構文―現場性・眼前性

随想章段では、（A類）（B類）（C類）問わず、現在時の事態について推量をめぐらす助動詞「らむ」が比較的よく用いられている。類聚章段でも、「をかし」の根拠を示す事態を随想的に描くところでは、「らむ」の使用が見られる。

この語の用法は、描く事態の時に視点（今ここ）をおいて、（今ここ）においては確定的に認知できない、同時の事態の存在やその状況を推測することにある。ほとんどが「思ふらむ」「いふらむ」など、人の行動や様子についての推量である。この視点は、筆者の発話時（今ここ）と重なることもあるが、ほとんどが重ならず、描く事態の時に視点（今ここ）がおかれている。言い換えれば、事態を臨場感をもって描いていると言うことである。随想章段の叙述に現場性、眼前性があるのである。こうした叙述の姿勢は、「見ゆ」「聞こゆ」「おぼゆ」や終止接の「めり」「なり」の使用にも連動している。また、「たり」によって「めのまえ性」[注⑦]が発揮されていることになる。「たり」は、「今そういう状態にある、そういう状態のもとにある」という事態認識を示す。さらに「つ・ぬ」や先に分類した（イ）の用法の「む」なども、描く事態時における視点（今ここ）との関係で事態の時が認識されていることを示す助動詞群である。

仮想された事態を叙述する上で、その事態を眼前のことのように描くことで、描かれる事態に現実味が帯びて、筆者の経験・体験を語っているのではないかという日記的な叙述になっている。あるいは物語的な叙述になっているとも言えよう。

（五）最後に

『枕草子』全体に「たり」の多用が目立つと言えるようだ。が、特に随想章段では、「をかし」の追求において、事態（こと）を「たり」で捉えて、事態の有り様・状態（さま）に「をかし」の美を見いだしているのである。『枕草子』は、いわば「見え」の好ましさを

追求することが中心的課題であった文学なのである。

注① 内尾久美「枕草子の言語―文法」(『枕草子講座』有精堂)

注② （ ）の数字は章段番号。底本は渡辺実校注『枕草子』(岩波書店・新日本文学古典大系)

注③ 注②の底本に同じ。脚注による。

注④ 現代語の例であれば、とき節であると、

＊ 韓国に行く（＊行った）とき、関西空港で友人に会う（会った）。

従属節で「行く」「行った」の選択は、「関西空港で友人に会う」という事態との時間的関係で判断される、つまり事態時が基準、しかし文末の「会う」「会った」の選択は、主体の発話時の（今ここ）を基準にして選択される。

注⑤ 藤井貞和『日本語と時間―（時の文法）をたどる』(岩波新書・2010)において、時に関わる助動詞群を「kasm 四面体」という体系をなすと説き、「けり」については「時間の経過（過去から現在へ、過去からつづいていまにある時間）」を示すと定義している。これは、「けり」が語源的に「き＋あり」の融合形と捉え（「き」については、過去の「き」、「来」の連用形の「き」両方に渡るとする）、事態の時の認識として、その「き」を重視している。私見は、どちらかというと「あり」を重視している。すでに事態として現在において存在していることに、今気がついたという認識を示すのが「けり」の根本的な機能と見ている。

注⑥ 注②の底本に同じ。

注⑦ 鈴木泰『古代日本語時間表現の形態論的研究』(ひつじ書房・2009)参照。

（龍谷大学名誉教授）